

# 「老い」と「死」を考える

—生涯教育における後半の課題としての—

村 島 義 彦

岡山理科大学教養部

(1990年9月30日 受理)

## <はじめに>

「国際化」「情報化」に並んでとりわけ今日を浮き立たせるメルクマールの項目として、われわれは、「人生80年型社会」への突入を挙げることができる<sup>1)</sup>。医療および医療面での飛躍的な前進によって、平均寿命は急激な伸びをみせ、かつては人生の慶事として祝された「還暦」や「古稀」も、今日では、ほとんどの男女が当然に通過すべき年齢上の一段階でしかない。「喜寿」はおろか「傘寿」をも、果ては「米寿」ですら具体的な慶事の対象としつつあるのが、われわれの偽らざる現状であるといつてよい。「人間50年、下天のうちを比ぶれば、夢まぼろしの如くなり」と謡曲の『敦盛』にも詩われ、信長等の戦国武将によって壮烈かつ勇壮に生きられた「人間50年」の時代、10干12支の一巡する「還暦」に相当する61という年齢は、まさに人生の一巡として、ひとつの人生がともかくも全うされた年齢的な証しとして、大いに祝福されてしかるべきものであった。「古稀」にあたる70という年齢もまた、杜甫の『曲江』に詩われるように、「人生70古来稀なり」の意味における文字通りの「古稀」であった。こうした時代の人びとの目には、「喜寿」(77歳)や「傘寿」(80歳)、ひいては「米寿」(88歳)をも“寿”ならぬ“当然”として味わうわれわれの生は、おそらく、羨望あるいは垂涎の対象として映じたことであろう。

けれども、こうした羨望ないし垂涎は、本当の意味において妥当であったのかどうか。平均寿命がまだ60を出ぬあの時代、いかに元服や成人式が早かったにせよ、また、医療手段がどれほどに劣っていたにせよ、死を迎える60前後の状態は、肉体と精神の両面において、80前後ほどの衰退と萎縮をみせていなかったことはいうまでもない。60前後といえは、今日ではさしずめ、定年を迎えて社会的・職業的な生を一応はリタイアする時期にあたる。今ほどの体力・知力・活力は望めないとしても、そこでの老年と死は、今日の60～70台に相当する心身の状態を維持しての老年であり、かつ死であったといつてよい。われわれの直面する、80前後の心身の状態を前提に置いた老年と死とは、明らかにその内容を異にして、両者を同列に論ずることは、あくまでも乱暴のそしりを免れえないであろう。心身両面の衰えが進み、有吉佐和子が克明に描く「恍惚の人」的な状況下で迎える老年と死なら、古えの人たちは果して、長寿を獲得した今日のわれわれを、それほど手ばなしで

羨望したかどうか——この点は大いに疑問としなければならない。

「吾十有五にして学に志す，三十にして立つ，四十にして惑わず，五十にして天命を知る，六十にして耳順う，七十にして心の欲する所に従えども矩を踰えず」——『論語』為政篇4に語られた，あまりに有名な孔子白らのこのライフサイクルの紹介では，70という人生の最晩年期が，「心の欲する所に従えども矩を踰えず」という表現をもって，「而立」「不惑」「知命」「耳順」の各段階を経て到達される境位的ゴールないしエンドとして，最大の重さと輝きをもって位置づけられている。孔子の場合は特別としても，ここに描かれた老賢者のイメージ，あるいはより一般的に「老年の尊厳」といった基本イメージは，一昔前にはかなり広く共有された馴染みのイメージではなかったか。これと比べる時，「恍惚の人」あるいは「ボケ」を直接に連想させる昨今の老年の脱尊厳化は，いささか異様な感じを抱かせずには措かない。

老年の極端な価値転落を招き入れた要因としては，むろん，さまざまのものを挙げることができるであろう。社会そのものが「人生60年型」から「70年型」へ，さらには「80年型」へと変貌する中で，先にも見たように，老齡者の心身両面での衰退と萎縮は思いのほか進行し，「老賢者」よりは「恍惚の人」，「尊厳」よりは「モウロク」（あるいはボケ）が老齡の共通イメージとして固定し始めたことも，そのひとつであると思われる。さらには，社会がますます「HAVE」価値への傾斜を深め，評価の基準がいわゆる「もちもの」の多寡に置かれつつある結果<sup>2)</sup>，体力・気力・活力等の「もちもの」の総量において当然に勝る人生の前半期に，後半期以上の価値と意義と注目が集められ，文化にせよファッションにせよライフスタイルにせよ，その中心がおしなべて「老」→「壮」→「若」に移りつつある全体的状況も，これに大きくあずかっていることはいうまでもない。

さらに挙げるなら，河合隼雄氏の指摘する「科学の知」による「神話の知」の駆逐一般も<sup>3)</sup>，当然これに加え入れられてよいかもしれない。自己と世界を明確に切り離し，対自化されたこの世界を冷静に分析・観察して得られる「科学の知」は，自己そのものを世界の中に位置づけて，世界と自己との関わりの中でモノを見ていくといった，いうならば自分固有の神話ないしコスモロジーに関わる「神話の知」とは，本来的に異質の知であるにもかかわらず，前者は，今日の科学的発達に支えられて，事実の世界のみでなく，われわれの営為の世界一般にも浸透し，ここに座を占めていた後者の知を駆逐して，すべてをこの知一色に染め上げる傾向を示してもいる。こうした状況の中で，老年の尊厳を構成するかなり太い一柱としてある各人固有の神話ないしコスモロジー（これの完成には多くの歳月と体験が必要である）は，“知”ならぬ恣意的・主観的な“フィクション”として片隅に押しやられ，ほとんど顧みられることはない。それに呼応して，老年の存在価値はますます希薄化していかざるを得ないのである。

あるいはまた，企業の大都市集中や，転勤の頻発等の今日的事情に促されて，核家族化が著しく進み，老年と死（つまりは老齡の祖父母とその死）がわれわれの身近な日常から

その姿を隠し始めたことも、間接には、老年の尊厳剥奪に少なからず作用しているのではないだろうか。家族の2世代化によって、老人の存在そのものが身近な空間から消え去り、われわれは、老年と死（とりわけ老衰死）に直かに接する機会を持たなくなってかなり久しい。身近に接しつつ折に触れて味わわれる老年の尊厳（あるいはその頑なさ）も、当の接触を欠く以上、リアルかつシリアスにイメージ化されることは困難といわねばならない。老年と死は、今日、テレビドラマの出来事と化したなどといったは、果たして言い過ぎであらうか。

他にもむろん、「老いと死」という人生後半のこの課題を等閑に付させる負の要因は挙げうるであろうが、ここでは少し方向を転じて、「老いと死」のもつポジティブな側面にとりわけスポットを照ててみたい。具体的には、老いの内にある当人よりはむしろ、彼と居を共にするメンバーの側面的を絞って、「老い」のもつポジティブな意味を探るとともに、「死」についても、この大いなる未知がどのような解釈をわれわれに許し、それと呼応して、生きられてあるこの生が逆に、どうした姿を纏うにいたるかを骨格的に試案してみようと思う。

## <1> 「老い」の再考

### (a) 「もちもの」の縮減としての老年

「老い」の期間を今、職場等での現役としての活動に捧げられた、社会的生を一応はリタイアして「死」を迎えるまでの、年齢にしておよそ60～80までと特定するなら、それは、これまでに採られてきた姿勢ないし構えとは基本的に異なるスタイルを否応なく要求されるという意味において、当人のライフスタイルの中で、かなり特異な位置を占めることに気付かれるのではないだろうか。そこでは、社会的生に付着して強い発言力をもった、個々人の才覚、容貌、気概、健康、体力、富、地位、職種、権勢等々のいわゆる「もちもの」が、あるいは一気にあるいは徐々に取り去られて、われわれは、むき出しの「自己そのもの」をもって、周囲の現実に対処していかなねばならないからである。社会的生を生きる中で、自らの職種、自らの地位、自らの役割と責任を介して、他ならぬ「自己」の上に刻み込まれた数々の刻印は、そうした外的な「もちもの」の取り去りとともに、有無を言わず、人びとの前に晒け出されざるを得ない。人に数倍する「もちもの」に訴えて、社会的生の各分野でそれなりの成功を収めた勝利の士といえども、勝利への過程で不可避免的に刻み込まれる「自己」への刻印が、あるいは吝嗇（ケチ）、あるいは頑なさ、あるいは猜疑、放縦、不実、非礼等々であるなら、リタイアののちに露わとなるのは、こうしたマイナスの刻印であるほかはない。どれだけの成功を収め、どれだけの仕事をやり遂げたかをもって評価されるのが、およそ社会的生の特徴であるとするなら、リタイア後の生の特徴は、それら成功や仕事を介して刻み込まれた「自己」への刻印が、そもそもいかなるものであったかをもって評価される点にある、といってもさほど言い過ぎではないだろう。

これまでの歩みを介して刻み込まれた刻印の質そのものが、周囲の現実との接触とその応答を鏡として、直接に、自らの眼の前に示し出される「老年」というこの期間は、誰にとっても、ある意味での「こわさ」を湛えた期間であるといつてよい。それまでの生においても、自己への評価に際しては、その才覚、その気概、その容貌、健康、体力、富、地位、職種、権勢等々の「もちもの」に加えて、それらを用立てる「もちぬし」の品あるいは格という点が、評価の項目から除外されていなかったのは事実であろう。けれども、「もちもの」のあふれる多彩さ、力強さ、豪華さに押されて、「もちぬし」の品ないし格は、評価の項目として見る限り、かなり霞んであるのがわれわれの現実ではあるまいか。評価の項目としてのこの歪みはしかし、老年に入り、「もちもの」の喪失と剥奪が加速化する中で、おのずから逆転せざるを得ない。「もちもの」の縮減は、それに逆比例して、「もちぬし」の質をいっそう浮き上らせるからである。そうした中であって、最後の最後に残されるモノは何か。このモノが、周囲に晒すのも恥かしい類いの品であるなら、そうした老年は、(自業自得とはいえ)まことに悲惨という他はない。

われわれは、誕生とともに、文字通りの「無一物」ないし「裸一貫」のままにこの世に登場し、以後、各種の「もちもの」を増やしつつ固有の生を生き、老年に至って、再び「もちもの」を取り去られつつ、元の「無一物」ないし「裸一貫」に帰っていくというサイクルを、ふつう一般には経過する。むろん、老年時の「無一物」を、誕生時の「無一物」と直ちに同等視することはできない。一方は、「もちもの」の未獲得という意味での「無一物」であるのに対し、他方は、「もちもの」の喪失と縮減といった意味での「無一物」であるからである。前者では当然、「もちもの」の獲得と使用に関わって記される「自己」への刻印は、いまだその姿を現わしていないのに対し、後者では、それが(プラスとマイナスを問わず)すでにくっきりと認められるといわねばならない。老年期の「無一物」はこのように、当の「もちもの」に関してのことであり、「もちぬし」の刻印に関してのことではない。ともあれ、こうした特色をもってライフサイクルの最終段階に位置づけられる老年期は、この世でのわれわれの営為の内的な総決算を、各人に、その最終の時点で抜け目なく用意する一種の「審きの場」でもあるということができよう。

この現実をわれわれは、自らのライフサイクルをその最終点まで辿る中で、否応なく体験していくのであるが、それはしかし各人が、老年に至って直接に体験する他のない、それゆえ、反省と後悔に常に一步先んじてある現実なのであろうか。この現実はむろん、直接には、老年を迎えて各人が、まさに各人の体験として体験する他はないだろう。けれども、間接になら、老人との共同生活の中で、近親者の立場からおそらくは体験できるのではないだろうか。“この自分には、今ある「もちもの」を取り去って、掛け値なしの「もちぬし」自体に帰った時、通用するに足るどれほどの価値・どれほどの意味・どれほどの権威がそこに残されているのか”——こうした問いは、あるいは宗教者、倫理家、哲学者等がもっぱらに口にする類いの問いとしてわれわれの耳にも久しいが、ここに問われてい

る中味は、それほどに難解でも専門的でもないとみななければならない。その答えは、直接には、老年に至って各人が、おのずからに見い出しうるのであろうし、間接には、居を共にする親族の老齢者の内に、身近な形で確かめられもするであろうからである。フロムの言葉を借りるなら、これまでの「HAVEの様式」に代って、「BEの様式」を否応なく用いざるを得ない状況が、各自のライフサイクルの最終地点に避けがたく待ち受けている事実を、あくまでも事実として、その生の実際を介して当の本人に示し教えるところに、老齢者との共同生活（つまりは3世代家族ないし大家族）のもつ教育的な意味の大きなひとつは求められると思われる。

老年の内に見い出されるべきこうした意味は、ところで、「およそこの世の事柄の内、真に大真面目に取り組むに足るようなものはひとつとして見当らない」というプラトンのあの言葉を、連想的に呼び起こさないであろうか<sup>4)</sup>。『国家篇』604Cや『法律篇』803B～Cに登場するこの言葉の含意は、むしろ、「この世の事柄」の価値否定にあるのではない。そこで訴えられているのは、「この世の事柄」はすべて、われわれの魂がそれと格闘し、この格闘を通して自らを練り上げ、いっそう上へと向かうべく働きかける、いうならば「学科目」ないし「教材」に他ならず、それゆえ、こうした「教材」ないし「学科目」としての「事柄」そのものに拘泥し、当の「事柄」のみを眼中に置く極端な「大真面目」さは、かえって、その「学科目」ないし「教材」としての契機的働きを圧殺する結果をも招きかねないため、この点はよくよく心すべきであるといった内容である。「この世の事柄」は、なるほど「大真面目」に取り組むに足る対象ではないにせよ、少なくとも、「真面目」に格闘すべき対象ではあるのだ——これが、要するにプラトンの言わんとするところであったとあってよい。「この世の事柄」のもつ「契機」としての役割に着目し、その意義を“正しく”（すなわち必要以上でも以下でもなく、文字通り「掛け値なし」に）評価すべしというこの警告は、「もちもの」の意義を、当の「もちもの」自体の内に求めるのではなく、「もちぬし」に与える刻印との関わりにおいて考えさせるという、先にみた老年のポジティブな意味ともクロスさせる時、老年のもつ意味を、いっそう明確に浮かび上らせるのではないだろうか。

#### (b) 「鏡」としての老人

上に指摘したのは、「もちもの」の剥奪と縮減をその背に負わされた老年が、単にネガティブにのみ評価される必要はなく、よりポジティブには、各人が「もちぬし」のみに帰って周囲に対処すべき、いわゆる「BEの様式」に依拠した生活がおのずからに強られる特殊な環境ないし舞台として、ライフサイクルの上に固有の位置を占める事実われわれは、もっと目を向けるべきではないのかという点であった。これとも関わりつつ、老年には他方、いずれは訪れるであろう未来の自己の姿の一端を、われわれがそこに、間接の形にせよ垣間見る機会を与えてくれる、「鏡」としての機能も同様に備わっている点を付け

加えなくてはならないだろう。こうした老年の側面を、次に、子・両親・祖父母から成る大家族において、当の祖父母の果たす（未来を映す）「鏡」としての働きを探る中で、できるだけ具体的に浮き彫り化してみよう。

子・両親・祖父母という3世代が同居する大家族を、今、その性格、その容貌、その行動パターンの上での類同性に着目して年齢的に整理するなら、両親の世代を中心として、子の世代は20数年前の、祖父母の世代は逆に20数年後の、当の両親の姿をそれぞれに映し出したモデルとして位置づけることが可能ではないだろうか。全くの他人ならいざ知らず、血と習慣と生活を最高の密度で共有しあう肉親にあっては、存在の最も奥深いコアの部分で、気味悪いほどの類同性がかなりの頻度で追認されると思われるからである。わが子の示す何気ないしぐさの内に、その発想あるいは行動パターンの内に、目につく長所ないし欠点の内に、あたかも自身をそのままに写し出したかのような類同性を目にして、われわれは、言いがたい気分を襲われることが少なくはない。また、祖父母の応対、しぐさ、発想、長所あるいは短所の内にも、同様に、自身の写しとしての部分を確認して、われわれは、人知れずギクリとさせられるのである。こうした体験は、共有される幅の広さからいっても、とりわけポピュラーな体験の部類に数え入れられるのではないだろうか。

上に、「血と習慣と生活を最高の密度で共有しあう肉親にあっては、存在の最も奥深いコアの部分で、気味悪いほどの類同性がかなりの頻度で追認される」と表現したが、この「存在の最も奥深いコアの部分」はところで、当然ながら、共有される肉親たちに勝って、当の本人の中において、驚くほどの不動性を保持して認められるといわねばならない。虚心に過去をふり返る時、この部分が、歩まれた人生の節々において驚くほどに頑固に、くり返しその姿を覗かせている事実、われわれは改めて驚かされることであろう。子供の時期には、この時期にふさわしく稚拙なままに、当の状況に応じて、ある種のパターンをもった行動なり発想なりが発現し、その帰結が、同様に稚拙なままに体験される。さらに長じてキャリアを重ね、関係のネットワークも格段の広がり複雑性を増す中で、われわれは、緻密度は数段に勝るものの、パターンとしてはあくまでも同列の行動なり発想なりを示し出し、パターンとしてはやはり同列の帰結を体験して、幼い折の体験との類同性を改めて意識することが少なくはない。こうした気づきは、幼年期、少年期、青年期、成人期と時代を経るにつれ、一般にはいっそう深められ、まさに確信の域にまで高められてゆくのが、われわれに共通した“思い出”のひとつというべきであろう。プラトン『国家篇』の最終章に登場する有名な「エルのミュートス」<sup>5)</sup>には、この世に再生する直前の魂たちが群がって、この世でそれぞれに生きるべき人生の中味を選び取る「場」において、自己の性格のコアに応じ、それに見合う人生をそれぞれに選び取る（というよりはむしろ、それに見合う人生しか選び取りえない）光景が、異様な迫力をもって描き出されているが、こうした描写も、われわれに備わるコアの頑固さと不変性を暗示するものとして、かなりのリアリティと説得性を備えているとみななければならない。

この種のコアをわれわれは、幼年、少年、青年、成年、老年といった、置かれた状況も関係も異なる「場」の中で、くり返し展開していくほかはない。こうした現実はいかに、自らの人生を歩む中で直接に、各人に味わい知られることに加えて、われわれの周囲に生きるモデルを介して、あくまでも間接に示し出されることも可能であろう。「われわれの周囲に生きるモデル」とは、（当人が親の場合には）その子であり、その祖父母であることは改めて断わるまでもあるまい。コアを共有する子ないし祖父母は、親にとり、あるいは20数年前の、あるいは20数年後の自身を写す「鏡」としてのモデル性を備えているといっただけからである。自身の過去と未来を、たとえ間接にもせよ、常に身近に見聞できる意味は存外に大きいといわねばならない。わが子の生きるパターンの中に過去の自身への反省を読み取り、祖父母の生きるパターンの中に、未来の自身への備えを読み取る——こうした「反省」と「備え」が、3世代の共同生活を介しておのずと体得され血肉化していくところに、大家族における子と老人の意味のひとつが見い出されるのではないだろうか（その中でも、「未来の自身への備え」を促す「鏡」としての老人の意味は、とりわけ大きいと思われる）。巷に膾炙するように、“子供を叱るな、来た道ぞ。年寄りを笑うな、行く道ぞ”なのである。

大家族の中での子と老人は、共に、あるいは自らの過去を、あるいは自らの未来を映し出す「鏡」として位置づけることが可能であるとしても、そうした鏡を、まさに鏡として活かし切っていないところに、われわれの瘦せた、すこぶるに乏しい現実のあることを、われわれとしては、あくまでも素直に認めざるを得ないであろう。居を共にする子と老人の含意（とりわけ老人のそれ）を把握できないままに、単なる同居的高齢者として無感動かつ機械的に、あるいは、手間のかかる「お荷物」ないし「厄介物」として邪険かつ煩わし気に、老人との接触を保っているのが、世の成人の一般的な姿であろうからである。近年はさらに、核家族化の進む中で、老人そのものが、家族の構成メンバーから大きく除外されつつもある。「鏡」としての老人の機能は、われわれの教育的伝統から消え去らねばならぬ運命にあるのだろうか。

## <2> 「死」の再考

これまで、「老年」をどう解釈するかに応じて、ライフサイクルに占めるその位置が大きく異なってこざるを得ないこの事実を、「もちもの」の縮減としての老年、「鏡」としての老人という2点からざっと浮き彫り化してきたが、次には、「老年」の延長上に待ち受ける「死」——この死はむろん、老年の延長上にのみ位置づくわけではなく、幼年、少年、青年、成年といった各段階の傍らに、常に生と隣り合う形で認められるのであるが——について、およそどのような解釈が可能性として許され、この解釈に呼応して生が、これまでに変わるどのような姿を映し出すに至るかを、簡単に吟味してみよう。

## (a) 死のモデル化——「テレビ・セットと電波」

「死」は今日、一般には、肉体機能の停止に加えて、意識作用の停止としてもイメージされているけれども、このイメージは果たして、それほどに無理のない妥当かつ的確なものなのであろうか。冷静かつ公平な観察に基づく限り、前者の「肉体機能の停止」については直接に確かめられるとしても、後者の「意識作用の停止」については他方、それほど直接に確かめられうるのかどうか。「死」を境として、意識作用が（肉体器官という媒体を介して）外部に現われ出なくなる点は事実としても、こうした現出の不在をもって、直ちに、意識作用そのものの停止ないし消失を結論づけてよいかどうかは、大いに疑問としなければならないだろう。現出の道具あるいは媒体としてはたらく肉体器官の停止により、意識作用の現出は事実的に不可能となるとはいえ、これをもって当の意識作用が、それ自体として停止あるいは消失したと結論づけるには、その間に、さらに埋めかつ補わねばならぬ諸点があまりに多く介在すると思われるからである。

たとえば今、ひとつのアナロジーに訴えてこの点を視覚化してみよう。われわれのもつ肉体機能（わけてもその大脳機能）と意識作用の関係は、一般に、プラトンが『パイドン』85E～88Bに紹介した2つのモデルのうち、当時においても圧倒的な優勢を保っていた、あの「旋律モデル」<sup>6)</sup>に依拠してイメージされるのがほぼ通例ではないだろうか。すなわち、前者と後者の関係は、リュラ（竖琴）やフルート等の楽器類と、それによって奏でられるメロディないし旋律の関係に移して、まさにモデル化されるわけである。ところで、“肉体機能：意識作用＝楽器：旋律”といった比例式にあっては、旋律としての意識作用は、楽器としての肉体機能に自己の存否を全面的に委ねざるを得ず、肉体機能の不調なり故障なり崩壊とともに、意識作用も乱れ、休止し、消失することを避けがたい。「旋律モデル」に立つ限り、意識作用は、肉体機能の副次的所産として、前者とその運命を共にしないわけにはいかないのである。「死」において直接に確かめられる肉体機能の停止は、このモデルを奉じる限り、意識作用の停止とも結びつけられて何ら不都合はない。こうした直結はしかし、あくまでも、上にみた条件（すなわち「このモデルを奉じる限り」という条件）を守ってこそ成立する点を、われわれとしては、うかつに忘れてはならないであろう。

肉体機能と意識作用の関係は、ところで、こうした「旋律モデル」のみに頼ってイメージする必要はむろんないとみなければならない。両者の関係を考えるにあたっては、手近な日常用品にモデルを求めて、いずれの家庭にもお馴染みのテレビ・セットと、放送局から発信されるテレビ用電波の関係を頭に描くことも、当然に可能であろうからである。セットそのものが新しく、チャンネルを介した電波のキャッチが的確である限り、テレビの画面は、送られてくる電波を正確に画像化することができる。大脳機能に異常のない限り、意識作用は、この大脳を介して肉体的に、外部に表出され観察可能となるのとまさに同様である。ところで、テレビ・セットは道具であり、道具である以上は必然的に、故障し、



摩滅し、老朽化し、壊れ去る運命を免れることはできない。大脳も同様に、脳内血管の閉塞や脳細胞の老化を介して、その機能が著しく低下あるいは（一時的に）停止したり、脳組織を直撃する事故によって、機能そのものを回復不能なまでに失い去る具体例を、われわれは、かなり頻繁に目撃している。こうした目撃に際し、ほぼ例外なく下される一般的解釈の底に認められるのは、大脳機能の停止とともに意識作用も停止したという、あの等式の暗黙の共有ではないだろうか。だが、再びテレビ・セットと電波の關係に置き直して考えるなら、こうした等式を共有する滑稽さは、まさに一目にして瞭然といわねばならない。

テレビ・セットが老朽化し、電波のキャッチ力や画像化機能に衰えが出て、結果的に、画面上での結像が困難となった場合にも、われわれは、“ついにこのセットも駄目になったか”（その意味はむろん“電波を映像化する力をついに失ったか”である）とは嘆息するにせよ、間違っても、“送られてくる電波自体がついに途絶えたか”などと結論することはない。映像の不在に接してまず考えられるのは、電波の不在よりはむしろ、変わらずに在るこの電波をキャッチする道具の側での機能上の不在（つまりは故障）であろう。これを投影して、大脳機能の停止と連動した意識作用の表出停止という事態についても、同様に、当の意識作用はそのままに存続するのだが、それを表わし出す工具的媒体としての大脳と肉体が自らの機能を停止させているため、残念ながら、これの表出が阻害されているにすぎないと解釈しては果たして乱暴であろうか。観察される現象を虚心にみる限り、この方が、はるかにノーマルでナチュラルな解釈ではないかとも思われる。先にみた「旋律モデル」は、ノーマルかつナチュラルなこの解釈が論理的・実験的に否定されてのち始めて、次に検討されてよい第2の解釈として、同様に厳密な論理的・実験的な吟味を施されるべき、未だ“待機”の身の上に留まる「仮説」のひとつとして位置づけられるべきではないのだろうか。

「死」については、直接に観察される事実をめぐる解釈の点で、いくつかのモデル思考ないしアナロジー思考が可能であり、どのモデルないしアナロジーを奉じるかに応じて、「死」そのもののイメージも大きく変わってこざるを得ない。われわれは、頑なにモデルを固定することなく、「死」に関して報告される各種の情報をそのままに集める中で、それとの対比において、モデルの適・不適をあくまでも誠実かつ公平に吟味しなければならないであろう。ところで、「死」に関して報告された、とりわけ死の内部に立ち入った類いの情報はほぼすべて、一般にはこれまで、宗教に関わる世界から伝え漏れてくるのが常であったといってよい。そうした事情も手伝って、この種の情報が開示する中味は、宗教以外の世界ではさほど馴染みのない、どちらかといえばマユツバものの、例外ないし錯覚あるいは異常に属する事柄として、「怪・力・乱・神を語らず」<sup>7)</sup>と述べた孔子の姿勢を“謙虚”に踏襲するわれわれによって、真面目な研究の対象として正面から取り上げられることは、これまでのところ皆無に近い状態であった。最近ではしかし、患者の死と直かに対

峙するホスピスの分野で、キューブラー・ロス等の医師の手で、いわゆる「瀕死体験」(near death experience)に関わる情報が数多く記録され、臨床的事実として報告されるに至ってもいる<sup>8)</sup>。

「瀕死体験」の伝える内容には、当の体験者の性別・年齢・人種・性格・状況等を超えて、著しく共通した点がかなりはっきりと認められてもいる。この共通点を、河合隼雄氏は次のようにまとめている<sup>9)</sup>。

まず、耳障りな音が聞え、暗いトンネルを猛烈な速度で通り抜けたように感じ、自分の物理的肉体を抜け出て、ある距離を保った場所から、傍観者のように自分自身の物理的肉体を見つめている。自分にも「体」が備わっているが、この体は物理的肉体とは本質的に異質なもので、特異な能力をもっていることがわかる。すでに死亡している友人や知己の霊がすぐそばにいることも、なんとなくわかる。今まで一度も経験したことのないような愛と暖かさに満ちた霊——光の霊——が現れ、自分の一生を総括させるための質問を投げかける。生涯の主なできごとを連続的にしかも一瞬のうちに再生して見せることで、総括の手助けをしてくれる。そのうち、一種の障壁とも境界ともいえるようなものに少しずつ近づいていることがわかる。激しい歓喜、愛、やすらぎに圧倒されそうになるが、意に反して、どういうわけか再び自分の物理的肉体と結合し、蘇生する。このような体験は、その後他人に話そうとしても、適切に表現できる言葉が見つからず苦勞する。この体験をしたあとで、自分の人生は大きい影響を受け、自分の人生の幅と奥行が深くなったように感じる。

こうした内容が、「瀕死」という特異な状況下で、極度に興奮した心から生み出される根も葉もない主観的妄想ないし幻影の類いであるのか、あるいは、まぎれもない相互主観的事実としてあるのかの決定は措くにしても、この種の内容が無視できぬ頻度で臨床的に報告されている事実そのものは、やはり、素直に心に留めておく必要があるのではないだろうか。いまだ決着のつかぬ事柄はそのままに、文字通りの「未決着」として、いたずらかつ性急に決着を急ぐよりはむしろ、この未決着を保持しつつ、あせらずに日々を生きるのが人間としての“健全”な姿勢でもあらうと思われるからである。

#### (b) 生への眺め直し——「舞台としての人生」

「死」についての未決着は、文字通りに「未決着」として保持するというこの誠実を固く貫ぬく時、数々のミュートスに登場する「他界」に触れたエピソードは、この世の彼方を伺い知る間接的な手掛かりとして、用い方しだいでは、豊かな示唆と情報を与えてくれると思われる<sup>10)</sup>。そうしたミュートスの代表として、たとえば、先にも挙げたプラトン『国家篇』の「エルの語る不思議な物語り」があるといえる。

戦場において最期をとげ、12日を経て生き返った戦士エルの語るあの世で目撃された各

種の光景は、気味悪いリアリティを携えて、われわれの魂に訴えかけることをやめない。——死後にそれぞれの魂に下される、この世での所業の全体を勘案しての誤ることのない裁定。この裁定に基づいた償いあるいは恩恵としてのあの世での生。償いあるいは恩恵を経由し終った時点で開始される再生への道のり。この世への誕生を前にした生の選択。「責は選ぶ者にある、神にはいかなる責もない」<sup>11)</sup>と告げる神官の謎多い言葉。選び取られた生を携えて飲む「忘却の水」。すべてを忘れ去ってそれぞれに向かうこの世への旅立ち。——およそこうした荒筋を彩る細目については、ギリシアに固有の神・人物・場所・名称等々が随所に認められるとはいえ、当の荒筋そのものが、各国の「他界」神話に語られるところと強く共振し合うというこの一点のみは、見逃そうとしても見逃すことはできないであろう。

この種のミュートスを介してわれわれは、この世の生に浸りつつこの世の生を反省あるいは意味づけるという、従来の姿勢を一步ばかり抜け出して、この世の彼方をも含み込んだより大なる全体を想定し、この全体から改めて、この世の生をも眺め直し位置づけ直すという視点の可能性を示唆されもする。こうした視点の可能性は、ところで、「老年」を意味づける究極の根拠とも関わって、是非とも検討されねばならぬ問題のひとつというべきではないだろうか。ライフサイクルをイメージするにあたり、その広がりをおの世の生以上に拡張できない時、先に挙げた「老年」の位置づけとその意味も、つまりはニヒリズムを抜け切ることが困難ではないかと思われるからである。各種の「もちもの」を取り去られ、裸の「もちぬし」自体に帰った時、この「もちぬし」の価値のみで果たしてどれだけの通用が可能であるかを、各人に思い知らしめる「場」を避けがたく用意するのが「老年」のもつポジティブな意味であると考えてにしても、あるいはまた、「老人」とは、われわれがそこに20数年後の自身の姿を前もってモデル化する「未来の鏡」として、未来への心の備えをおの世から築かせる予見的意味をもつと解釈するにせよ、「死」とともにすべてが無に帰するのであれば、そうした「老年」あるいは「老人」の意味も、つまるところ何によって根拠づけられればよいのであろうか。そうした意味もその場合、結局は、ニヒリズムの中での主観的な意味づけに終らざるを得ないのではあるまいか。ここにその一例がみられるように、この世の生を意味づけるには、この世のみではあくまでも不十分というべきであり、さらに、この世の彼方との関わりをも導入しないことには、当の意味づけは、何としても適わないであろうと思われる。

では、「死」を経て登場する「この世の彼方」をも含み込んださうなる全体を想定して、今一度、この世の生を眺め直すならばどうなるか。その時、この世の生はいうならば、何幕かの展開をもった「劇」あるいは「舞台」として位置づけられることも可能なのではないだろうか。戯曲の天才シェイクスピアは、多少の皮肉を込めて、「人生は舞台、われわれは役者」といったセリフをその登場人物に吐かせている<sup>12)</sup>。このセリフをある程度は自由に、今の場合に引き寄せて解釈するなら、われわれを取り巻く状況的要素としてのこの

時代、この居住区、この家族構成、この社会的地位、この交友関係等々はすべて、その上で各自が固有の役柄を演じるべく用意された「舞台」を彩る細目として、また、生きてあるわれわれに備わるこの名前、この性格、この容貌、この性別、この国籍等々はすべて、演じられるべき役柄を彩る細目として、同様にイメージすることが可能であろう。この世に生を受けた当の時点で、今のこの芝居あるいは舞台の幕は上げられたのであり、上げられた限り、役者としての各人は、少なくとも次に幕の下りるまで、自らの引き受けた役柄をできるだけ見事に演じ切らなくてはならない。今あるこの生をもっぱらに、即自的かつ同一化のままに生きるのではなく、あくまでも「ひとつの」舞台として、対自化し脱同一化しつつ、しかしながら丁寧かつ配慮を尽して存分に生き切る姿勢をわれわれは、上にみた「人生は舞台、各人は役者」というセリフに潜むポジティブな含意として判読し、指摘することができるのである。

こうした姿勢はところで、いわゆるプレイないしゲームの精神にも類比できるのではないだろうか。あるスポーツ評論家は、われわれの人生を一種のスポーツ・ゲームになぞらえて、それに、「ゲームの中のゲーム」ないしは「ラージャー・ゲーム」(larger game: より大きなゲーム)という名を与えてもいる<sup>13)</sup>。かれに倣って、この人生をプレイないしゲームとして把え直す時、ゲームの場合と同様、共有されねばならぬルールが少なくとも3つあると思われる<sup>14)</sup>。まず第1に、定められたルールを固く守り合うこと。マージャン等のギャンブル型のゲームですら、互いにイカサマをやり合ったのでは、ゲームとしての成立はおぼつかないからである。第2には、気を抜かず真剣に取り組むこと。ゲームに挑む熱意が薄いと、緊迫感も失せ、味気を欠いたゲームがあとに残されるのみだからである。そして第3に、間違っても深刻にはならぬこと。ゲームである以上、勝敗を避けて通ることはかなわず、結果を悔やんで深刻になり、その都度に思い詰めていたのでは当の身がもたないからである。今の結果は次への反省の糧とする——すでに終了したゲームの価値は、これ以上でもなければ以下でもないといわねばならない。およそこうしたルールのいずれかに抵触する時、ゲームはゲームであることを辞め、われわれにとっての負担ないし重荷と化すことになる。

人生をゲームとみることは、この人生に上の3ルールを適用し、わが身をもって実践していくことでもある。ゲームとしてのこうした実践を支える基底には、むろん、この世に加えて、この世の彼方をも含み込んだ大いなる全体が、前もって想定されていなければならない。この全体の中に位置づけられて始めて、今のこの人生は、数ある舞台の中のあくまでも「ひとつ」(ONLY ONE ではなく ONE OF THEM)として、あのゲームの姿勢をもって生きられうる奇妙な余裕も導き出されてくるからである。〈1〉の(a)において、われわれは、「およそこの世の事柄の内、真に大真面目に取り組むに足るようなものはひとつとして見当らない」というプラトンの言葉を、「もちもの」の縮減と結びついた老年に関わらせ、「もちもの」の契機的意味を指摘した好例として引き合いに出したのである

が、この言葉は本来、上にも見たように、この世の彼方をも視野に収めた大いなる眼には、「この世の事柄」はすべて、こうした全体との関わりの中であくまでも相対的に位置づけられるべきものであって、間違っても単独で絶対的に評価されてはならず、その意味では、文字通り「契機」として位置づけられるのが最も妥当であると映る当の事情を、こうした言い回しを用いて暗に説き示したものであった。「この世の事柄」に必要以上の拘泥をみせず、その拘泥はあくまでも、「契機」としての分量にのみ留めるべし——ゲームの精神とも呼応し合うこの余裕、あるいは深刻の不在の導き出される所以について、われわれは、今一度の再考を加えてもよいのではないだろうか。

### <おわりに>

以上、「死」をどうしたモデルに依拠して考えるかに応じて、生に取り組む姿勢そのものも基本的に変ってこざるを得ない連関の一端を披露してきたが、こうしたモデル思考ないしアナロジー思考は、つまるところ、河合隼雄氏のいう「科学の知」ならぬ「神話の知」に大きくは属するであろうと思われる。〈はじめに〉でもいささか触れたように、これらの知は、その内容を著しく異にしている。異にはしてもしかす、この人生を生き抜くにあたり、“できるだけ豊かにかつ充実して生そのものを全うしたい”という狙いがあくまでも第1に掲げられる限り、果たして何がこの目的に裨益するかの視点から、そうした知も選別され、動員されて何ら差し障りはないといわねばならない。“この生をできるだけ充実して全うする”といった狙いの前では、「科学の知」も、動員されてよい知のひとつでしかなく、その意味では、「神話の知」と同等の価値しか基本的にはもちえない。問われる問いがこうした性格のものである限り、われわれは、「神話の知」をもっと堂々と用いて構わないわけである。ともあれ、この人生の意味は、この人生のみを視野に収めた場合には究極的な支えを欠いてニヒリズムに陥るほかはなく、こうしたニヒリズムの突破には、この人生の彼方をもそこに導き入れなくてはならない。これこそはしかし、われわれの人生がもつ大いなるアイロニーではないのだろうか。

### <註>

- 1) いわゆる『臨教審第1次答申』(昭和60年6月)でも、「第3の教育改革」を押し進めるべき理由として、「時代は、21世紀に向けて、真の国際化への転換、情報中心の文明への転換、さらに人生50年型から80年型社会への転換の時期にさしかかっている」(第1部・第2節の(3))というように、時代的・社会的な要請が大きく挙げられている。
- 2) E. Fromm, *TO HAVE OR TO BE?*, A Bantam New Age Book, 1982. (邦訳: 佐野哲郎『生きるということ』紀伊國屋書店, 1982年)には、2つの価値基準としての「HAVE」と「BE」の何であるかが、さまざまな角度から視覚化され紹介された上で、今日の抱える問題の大半が、その根を、「HAVE」価値への未曾有ともいうべき傾斜ないし偏りにこそもつ点が、くり返し力説されている。
- 3) 河合隼雄『生と死の接点』岩波書店, 1989年, 134-137頁。

- 4) 「プラトンの考える〈あるべき人間〉の分析——〈正義〉論と〈靈魂〉論を中心として——」(岡山理科大学紀要第16号, 昭和56年)の(註13)を参照のこと。
- 5) 「正義は、正義それ自体において得であり、不正は他方、不正それ自体において損である」ことを証明するべく、自らの哲学論, 教育論, 芸術論, 道德論, 政治論, 認識論, 存在論等々を動員して展開されたプラトンの正義論は、その証明も一応は終了した時点で、付録ないしは“おまけ”の意味を込めて、正義のもたらす「報酬」の何であるかについても、生前と死後に分けつつ(簡単にはあるが)改めて言及している。この「エルのミュートス」は、後者の“死後における正義の報酬”の箇所(614B~621D)に等身大に重なり合っている。
- 6) 『パイドン』では、われわれの魂が“不死か否か”を吟味するにあたり、魂と肉体の関係を、どのような比喩に託してイメージするかに応じて、導き出される答えそのものも、どのように異ってこざるを得ないかの実際が、「魂：肉体＝旋律：楽器」および「魂：肉体＝着用者：衣服」という2つの比例式を用いて視覚化されている。前者が、ここにいう「旋律モデル」であり、後者は他方、(次に紹介する「テレビセッター電波モデル」ともカテゴリーを同じくする)「衣服モデル」である。「生涯教育の人間形成論的再考——ラングラン、フォール、答申を吟味して——」(岡山理科大学紀要第19号B, 昭和59年)の67-68頁をも参照のこと。
- 7) 『論語』述而篇20にみられる原文の「怪」「力」「乱」「神」はそれぞれ、「常」「徳」「治」「人」に対応する。道德において論じられるべきは「怪・力・乱・神」ではなくて「常・徳・治・人」、つまりは現実的、具体的、人間的な事柄であるというのが孔子の基本姿勢であった。
- 8) E. キューブラー・ロス(秋山・早川訳)『新・死ぬ瞬間』読売新聞社, 1988年の「第13章・子供たちと死の霊的側面」(305-339頁)など。
- 9) 河合隼雄, 前掲書, 65頁。
- 10) 河合隼雄, 上掲書の「(9) 日本昔話の中の他界」(295-308頁)など。
- 11) 「アイティアー・ヘロメヌッ・テオス・アナイティオス」『国家篇』617E
- 12) 「人生は歩きまわる影法師, あわれな役者だ, 舞台の上でおおげさに見栄をきっても, 出番が終われば消えてしまう」——破滅を前にマクベスは、虚ろにこう呟いている(『マクベス』第5幕・5場)。
- 13) G. レナード(山本光伸訳)『魂のスポーツマン——君は人生を踊っているか——』日本教文社, 昭和57年, 135-159頁。
- 14) 野田俊作『性格はいつでも変えられる——アドラー心理学トーキングセミナー(オルタナティブ・ウェイ改題)』星雲社, 平成元年, 87頁。

## Some Consideration about Old Age and Death

—As the Main Theme in Second Half of Our Life-long Education—

Yoshihiko MURASHIMA

*Faculty of Liberal Arts and Science*

*Okayama University of Science*

*1-1 Ridaicho, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1990)

It is said that we live in the “long-life society of 80 ages”. In such a society, the main contents and images about our “old age” and “death” have largely been changing in comparing to our forefathers ones. The old age and death for us are those of “80 ages”. They necessarily include many degenerations and declines in both sides of mind and body.

In almost cases, such old age and death used to be esteemed negatively. For example, old is equated with faded or senile or doting, not with wise or dignified. Death also is equated with end or disappearing from this world, not with new start or entering into another world. But there are both sides in every shield. I want to cast a light to the positive side of old age and death in this paper.

The main contents are like this;

<Prologue>

<1> Reconsideration of old age

(a) Old age as the decrease of our HAVING

(b) Old man as the future-mirror

<2> Reconsideration of death

(a) Modelling of death—TV set and TV wave

(b) Reviewing of life—Life as the stage

<Epilogue>